

## 第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

### 報告書資料 復興支援 - 19

学校名・団体名	熊本市立城北小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	特別支援教育の視点を大切にした学びの創造
<p>〈活動・研究の意義および活動報告〉</p> <p>今回の教育助成金による教育効果は以下の通りである。</p> <p>まず、教育助成金の一部利用して、職員のコミュニケーション能力の向上を意図して、日本コーチ協会の原口 理加氏を招聘して校内研修を行った。平成30年6月25日に校内研修の中で実施した。本来は、学校教育外の人材のため、報償費が高額となるためになかなか招聘できないことが多かったのだが、日本教育弘済会の助成金と合わせて2万円の報償費を捻出し、校内研修を行うことができた。保護者対応や子ども理解、職員同士の人間関係の向上など、教育現場では職員のコミュニケーション能力の向上は喫緊の課題である。その中でチーム学校として専門家の力を借り、職員の資質・能力を向上させることができた。本校の大きな課題であるのは、児童の心のケアで、熊本地震以来、行動に落ち着きが見られず他者に対して攻撃的になり、あるいは学習に集中できず、不登校傾向が強まった児童が多数存在する。家庭環境面でも厳しい状況の児童が多い。その中で子どもを理解していくためにも必須の研修であった。本助成金により今回のような研修を実現できたことは大きな成果である。</p> <p>2点目は、今回の助成金により、筑波大学附属小学校での研究発表会、UD研究会での第7回授業UDカレッジ、山口大学附属小学校研究発表会、お茶の水女子大附属小研究発表会、熊本県国語教育研究会人吉大会と5つの研究発表会に職員を派遣させることができた。本校の校内研修テーマは授業のUD化であり、子ども理解にもとづく授業実践を行っている。研究の根幹として、授業のUD化に関する研修は不可欠である。しかし、ここ数年、学校予算だけでは先進校での実践に学ぶことができないでいた。本助成金によって、授業UD化に関する筑波大学附属小学校での研究会に2回も派遣することができたことは大きな成果であり、早速、研修で学んだことを復講し、各学級での実践を行っている。本校で学びにくさを感じている児童に</p>	

対して、子ども理解にもとづく授業を日常的に行うことにつながっている。このことも本助成金による大きな成果となっている。

3点目は、本助成金によって、特別支援の視点にもとづく教材を購入することができた。まず、授業のUD化に必須であるホワイトボードである。授業のUD化に際しては、授業を行う際に「見通し」を提示することが必要となる。本校の研究では「視覚化」及び「焦点化」の面で必要となる。通常の黒板だけでは掲示スペースが狭くなり、子どもが授業での学びを振り返るための「構造的な板書」になりえていない場合が多かった。そのためにホワイトボードに副次的な板書や掲示を行うことを重要視してきた。しかし、ホワイトボードの総数が少なく、黒板のみに頼るような場合が多かった。熊本市では、本年度各学級に電子黒板と実物投影機が配置され、より子どもの学びに寄り添った授業展開を行おうと計画している。本校でも授業UD化に活用しようとして計画している。今回、助成によって1台ではあるがホワイトボードの数を増やすことができたために、各教室でホワイトボード、通常黒板、電子黒板の3面にそれぞれの役割を持たせて、授業を計画できるよう取り組む予定である。資料の提示や動画の提示などは電子黒板、学びを構造化し、必要な知識の習得に役立てる役割を通常黒板、学習の見通しを示したり、授業に必要なフラッシュカードを提示したりするためのホワイトボードと役割もたせた、3面配置により、「学びの構造化」を来年度の授業に取り入れる予定である。そこに4月から配置されるタブレットを組み合わせ、授業のUD化を一層進めようとして計画することができた。次に、体育授業用のジャンプサークルとパズル日本地図を購入することができた。この2つは、もともと特別支援学級からの備品要望があったものである。特別支援教育の観点により通常学級でも活用できる教材であり、授業に集中できない子どもや荒れをみせている子どものクールダウン用にも利用できる。子どもたちに習得させるべき資質・能力を伸ばすことと、子ども一人一人の課題に対応した学びを進めるという2つの観点から、今回のような教材を購入することができたことが成果となっている。ぜひとも来年度使っていきたいと考えている。

最後に、職員全員が毎日の授業での教材教具の作成に必要なカラープリンタの消耗品を購入することができた。校内でカラープリンタが使えない場合、もしくはモノクロ印刷しかできない場合、職員の多くは自宅のカラープリンタ等を使って、印刷を行ってきた。そのためにかかる費用を学校で賄うことができた。

以上のように、今回の研究助成により、「職員が児童の問題行動等に対応しながら、教材開発や教材研究に集中できる状況をつくり、先進校の授業を見て研修を行い、実践につなげていく。」という状況ができあがった。今年度の成果をいかして、来年度も子ども一人一人を大切にしたい授業実践、学校運営を行おうと考えている。